

主婦のグループが成しとげた民俗調査のみごとな記録

——『福生市史資料編 民俗』を読む——

中島 恵子

『福生市史資料編 民俗』は、上巻四一八ページ、下巻

三一八ページ、計七三六ページの大部な報告になった。調査・執筆に長い年月にわたって指導的役割を果たした市史編集委員の河上一雄氏は、上巻の「あとがき」で、当初一冊の予定が上下二分冊にふくれあがった事情について、

「その理由はまさに『生活者の目をもって』というところにある。調査員の方々が、実に従来の民俗学の資料報告にはみられないようなきめのこまかい、かつ生活実践者としての調査をすすめてくれたから」その一つ一つの報告は何一つおとせないものばかりになったと述べ、「地域に根ざす生活者の目で」ということが、この民俗編の大きな特徴になっていると言われる。なお、上巻は平成元年六月刊、

下巻は平成三年三月刊。

調査協力者と資料提供者は、神社・寺院等を含めて三百数十人に及び、これら福生市内外の人々を対象に綿密な聞き取り調査と資料収集活動をおこなった調査員は、市教育委員会主催の『婦人セミナー 私の民俗誌をつくる』の参加者でつくった「ゆずりは」のメンバーを中心に構成されている。「ゆずりは」は主婦七人のグループで、現在四十年代から六十代、戦後に福生市やその周辺に嫁いで、世帯を持った人が多い。その結果、市史編さん委員会会長の野島茂雄氏が「発刊に当って」で言われるように、生活者の目によるきめの細かさや読みやすさが特徴になり、「生活文化―民俗―」という分野に対する調査において、ともすれ

ば専門の研究者に委ねられがちな報告が、市民参加というかたちで地域の主婦を主体にして成しとげられている。

福生市は、もともと東京近郊の畑作中心のムラであり、昭和に入ってから基地化・都市化によって大きく変貌し、戦後さらに在日米軍の横田基地のある街となった。基地の街であり東京西部のベッドタウンといわれるなかで、生活文化―民俗―のありようは急速に変化し、このような市全体まちの社会変容とともに生きてきた市民自身が、畑作を中心とし養蚕も盛んであった暮らしの伝承を、丹念に語り、記録することに情熱を傾けたといえる。地元の婦人グループを主体とした成果は、特に衣食住の生活面に現れ、「従来もとの民俗調査報告とは一味ちがう」と、「はじめに」においても自負されている。

河上一雄氏は、前記「ゆずりは」のメンバーが、市教委主催の成人教室の一つ、民俗学講座で、市史編集に参加する五年も前から民俗学を学んできたこと、彼女らは「ごく平凡な市民」で、主婦であり母である立場から調査に取り組んできたことを強調される。この民俗学講座で私も昭和六一年に、機織りを中心とした女性のはたらきについて話させていただく機会を得た。なお、「ゆずりは」のメンバーの中からは、民俗学の良き研究者として、現在ひろく活動している方も出ておられる。

本書は、上下を通して七部から成り、第一部・生業と衣

食住、第二部・季節のリズム、第三部・人の一生、第四部・社会生活、第五部・信仰生活、第六部・口承文芸、第七部・民俗芸能で、各部の構成と担当は、それぞれ次のようになっている。(敬称略)

第一部 農業・養蚕(山崎ヨシ江)、川漁(宮田満)、食生活(浅井薫)、衣生活(保坂和子)、すまいと生活(保坂和子)

第二部 正月・春から夏へ・盆・秋から冬へ(保坂和子)

第三部 誕生と成長(森田節子)、婚姻(木下直子)、葬送(橋本増)

第四部 ムラの自治・ニワバとクミアイ・年齢集団・共有財産とムラ仕事・家族と親族・互助と交際・掟

と制裁(河上一雄・川鍋幸三郎・佐野和子)

第五部 神社・寺院・信仰の講・屋敷神(横地美枝子・佐野和子を中心に「ゆずりは」の全員)

第六部 伝説・世間話・笑話・くらしの中のことば・伝承唄(保坂和子を中心に「ゆずりは」の全員)

第七部 福生の民俗芸能・福生村における天王祭の変遷・福生天王囃子・福生重松流祭り囃子・長沢染師

念仏鉦はり・資料(橋本孝蔵を中心に)

以上のように、「ゆずりは」の全員の他に、民俗学研究者の佐野和子氏や、それぞれの専門分野から男性四人の方が担当している。調査の方法や対象に特色のみられる幾つ

かを、簡単に紹介しよう。

まず、この土地の生業を代表するものの一つである「養蚕」は、大変な労力と神経の要る飼育法が事細かく記録される。昭和初期からこれが徐々に省力化され、男手不足の戦中から戦後にかけて、一層の工夫合理化が行われてきた経緯も跡づけられて、養蚕を時代の波に乗って守り抜いてきた農家の努力のさまが改めて感じられる。

「川漁」は、この分野でも研究成果をあげてこられた宮田満氏が担当された。多摩川上流に奥多摩ダムが建設されてから、下流の福生も、漁種・生棲量ともに激変減少して、鮎漁中心の昔日の面影はなくなったという。しかし、それであるからこそ、市内の古老から漁法の数々を聞き出す意味があったわけである。なお、明治期の熊川村漁業組合の項には、漁業組合に関わる十数篇の史料が添えられている。

「食生活」をみると、ここでは田米（水稻）は作れず、オカブ（陸稻）だけで、田米は正月と盆用に秋田米、あとは外米を買い、麦や粟などを混ぜて過ごしてきた。詳細な記述が多く、例えば、ノシヨミ（ウドンの煮こみ）やフカシマンジュウ（酒マンジュウ）、サツマダンゴ、七味唐辛子や漬物、味噌、醤油など、それぞれの食品の作り方や食べ方が、台所に立つ主婦の目からみて、聞き取られている。また、年中行事や人生儀礼の食物の一覧表にも注目したい。

「衣生活」では、機織りの項が、前の「養蚕」とあわせ

読むと興趣が倍加される。賃機・キョウ（着用）などの機織りのさまが、女の働きとして浮き彫りにされ、衣服のくりまわしや衣類の保管まで、女と衣生活の関わりが目くばりよく記録されている。「衣服のいろいろ」に収められた仕事着から晴着、下着にいたるまでの記述も、女性ならではのものといえる。カーキ色の国民服を、戦時中いかに工夫して染め、作り上げたかという記録が、印象に残る。

「すまいと生活」は、屋敷構えと間取り、その機能など、住居が生活の場と生産の場を兼ね、ハレやケの行事もすべて行われていた様子を、昭和五〇年に行われた市の民家調査を参考に、聞き取り調査と合わせて再現している。間取りの移り変わり、各部屋の機能、住まい方など、随所に行き届いた調査者の目を感じさせる。

次に、第二部は、「季節のリズム」と名づけられた年中行事で、とくに正月の準備と食物、一月いっぱい行事の数々が、詳しく述べられている。トシガミ様をはじめオカマ様などの正月飾りの図絵が細かに描かれ、エビス講や盆棚の図解とともに、わかりやすく楽しいものとなっている。本章を通して、都市化のなかで各戸に伝わる行事が、季節感を今も人々に与えているさまが、よくわかる。

第三部の「人の一生」も、熱心な聞き取り調査をうかがわせる綿密な記述でまとめられている。「妊娠」のところでは、「妊娠と労働」というような項を設け、嫁は妊娠し

たといって日常の仕事をおろそかにしてはならなかったことが詳述される。出産の情景もつぶさに記録され、女性が調査した「人の一生」の特徴が、時代をへだててもわがこととして描かれている。また、子どものしつけと仕事についても、子供の生活実感のじみ出ている資料といえる。

第四部の「社会生活」は、ニワバ(庭場)に視点を置いた重厚な報告で、民俗学や史学の専門家が担当している。社会生活の基本的な構成単位であるニワバをムラとしてと

らえ、旧熊川村の内出・南地区を中心に、その諸機能が明らかにされ、ニワバやクミの実態についての突っ込んだ調査と分析とが、本書の大きな成果ともなっている。

第五部の「信仰生活」では、とくに屋敷神を中心として市内全域にわたる悉皆調査の成果が盛り込まれ、従来の市町村史などに例をみない特徴になっている。福生地区二〇二、熊川地区一・二一にのぼる屋敷神の一覧表は、まさに足であつめた貴重な資料として、多くのことを語りかけている。「信仰生活」全般でいえることは、多様多彩な講と、地域内の神社、および路傍の神仏、そして屋敷内に祀られた小さな信仰の対象とが、いかに結びつき、互いの関係の歴史を持ってきたかということへの尽きぬ興趣を、掘り起こしていることである。

第六部の「口承文芸」は、「暮らしの中のことば」に重点を置いてまとめたところに、大きな特徴がある。「こと

わざ」のほかに、「暮らしの中の教え」「しつけに関すること」「生活と生産の知恵」「吉凶をうらなう」「天気うらなひ」「聞きなし」「暮らしさまざま」「遊びの中のことば」に分けられ、その一つ一つにわかりやすく適切な説明が、ことばの生まれた土地の生活に即してつけられ、ことばを生きたきと再現している。地域独自の伝承の実態の事情から昔話の採集が困難であるため、昔話はとりあげず、伝説・世間話などを収録し、とくに世間話は、キツネ話をはじめ豊富な伝承が目くばりよく採集されている。伝説・世間話の理解に便利な「口承文芸地図」なども附せられ、ここにも細やかな配慮がされる。

第七部の「民俗芸能」は、地元で若い人たちに囃子などの指導もされ、郷土芸能の保存にあたっておられる橋本孝蔵氏が中心になってまとめられた。六月十五日の天王祭を中心に詳細に調査された報告である。

以上、かけ足で、本書の構成とその特質をみてきたが、地域の主婦(母親)を中心とする長年の民俗学の学習と、聞き取り調査が、数多くの協力者を得て、市民参加による生活文化―民俗―の、伝統と変遷の実態を浮き彫りにし得たことを、ともに喜びたいと思う。母親たちの仕事や、子や孫の世代に伝わり、引きつがれ、地域の文化の独自性を守り育てるよすがとなることを、心から期待する。

(なかじま・けいこ 狛江市文化財保護専門委員 狛江市在住)